

巻頭言

人間味のあるDXを

一般財団法人 日本建築総合試験所
常務理事 多賀 謙蔵



今年も新しい門出の季節を無事迎えることができました。GBRCの常務理事を拝命して間もなく3年、この間世界では新型コロナウイルス感染症との闘い、地政学的リスクの顕在化など、グローバルな難題が立て続けに起こりました。一方、巷ではSDGsと共にDXの掛け声があちらこちらから聞こえてきます。取り組むべき様々な課題がある中、ここではDX推進について想うところを述べてみたいと思います。

DX(デジタルトランスフォーメーション)のための重要なツールであるIT、AIといった分野は進化が目覚ましく、昭和世代の私にとっては必死で追いかけないとあっという間に取り残されてしまいそうです。身近なITのおかげで、入り口の知識はインターネットで容易に手に入れることができ、例えば“AIのメリット、デメリット”と検索するとズラリとその解説が出てきます。概ね同じようなことが書かれているのですが、あるサイトで「人間の強みを活かせる」ということをAIがもたらすメリットのひとつとして示されていることになんとなく違和感を覚えました。“業務の効率化”、“労働力不足の解消”、“コスト削減”、“利便性・安全性向上”等についてはよくわかる気はしますが、その結果、これまで人間が必要とされた場面がAIに置き換わっていく、即ち人間でなければできないことがどんどん少なくなっていくことになります。残された(数少ない?)人間にしかできないことについては確かに「人間の強み」を活かしますが、そこで活躍できるのは熾烈な競争を勝ち抜いた一握りの人になってしまうのではないかと。

この危機感は既に認識されていて、「AIによるコスト削減で得た利益の再配分ができない限り、AIの力でいい世の中につながるとは考えられない。」という大きな問題です。この問題を解消するアイデアは現状では出ていない、とも言われていて、結構悲観的な未来予測になってしまいます。そうならないためには“AI化が可能なこと”は必ずしも“AI化すべきこと”ではない、すなわちAI化が可能であっても人間がすべきことをしっかり見極めて残す、ということが重要になると信じたところです。「AIにスポーツの審判を任せられるか?」という問い掛けに議論百出するところにヒントがあるように思います。第三者機関として審判員の役割を果たすべきGBRCはこの見極めを重視して人間味のあるDXを推進し、「本当の意味での人間の強み」を活かしていきたいものです。